

ジェンダーと精神分析におけるヒステリー

大木清香

1 はじめに

フロイトの精神分析に関する著作が 1900 年を境に次々に刊行されたことにより、これまでは全く未知の領域であった人間の無意識が初めて近代的な方法によって学術的に解明されるようになった。フロイト自身が彼の著書『夢判断』に記述しているように、無意識への関心はすでに古代ギリシャから端を発しているが—例えばアリストテレス以前の古代の人々は夢を人間心理が作り出すものではなく、神のお告げだと考えた¹—、患者の症状を分析することによって、その無意識を体系的に明るみに出すことに成功したのはフロイトの精神分析からと言える。

『夢判断』によって無意識の近代的分析方法がほぼ確定したのであるが、意味深いことに、ちょうどその頃、その無意識の精神分析の対象となった被験者、つまり魂に何らかの障害をもった患者の多くは男性ではなく、女性であった。ウィーンの内科医であるブロイアー (Josef Breuer, 1842-1925) とともに、フロイトは 1895 年に 5 人の女性のヒステリー患者を分析対象として『ヒステリー研究 (Studien über Hysterie)』を書きあげている。女性患者はブロイアーによって治療を受けることになる 21 歳のアンナ・O (Anna O.) であり、他の 4 人はフロイトのもとへ通うことになるエミー・フォン・N 夫人 (Frau Emmy v. N)、ミス・ルーシー・R (Miß Lucy R)、カタリーナ (Katharina)、そしてエリーザベト・フォン・R 嬢 (Fr. Elisabeth v. R.) であった。この 5 人の女性たちの症状には、偏頭痛、視力の低下、激しい咳ならびに言語障害などが挙げられ、それらの障害は健常者の健康状態からは明確に区別されるべきものと考えられ、彼女たちの病名は「ヒステリー」と確定されることになる。ヒステリーは身体的な病とさらに精神的な病の原因が関与して引き起されると考えられる。彼女たちの病的症状は、定期的に問診され、長期にわたって診療されることによって改善の兆候を示したとされることもあるが、多くの場合何らかの理由によって診療は中断せざるをえなくなった。『夢判断』が書かれた同年、すなわち 1900 年にはフロイトのもとをドーラ (Dora) という 18 歳の女性が訪ねることになるのだが、彼女の長期にわたる診断をもとにして、フロイトは 1905 年に『あるヒステリー分析の断片』を出版するに至る。このような事例を挙げてゆくと、特筆すべきことに、20 世紀の近代を規定することになった学術的に重要な位置を占める精神分析が、医者という男性の視点から女性患者を分析するという方法によって確立されたことが明らかになってくる。² エランベルジェが精神医学史家としての立場から、残された報告書を基に再構築しているようにフロイトは 1886 年にウィーンにて男性ヒステリーに関する学会発表を

なるほど行ってはいるが、「外傷性」男性ヒステリーをそこに含めることに対する批判にあう。³ 症例となるべきヒステリー研究の被験者は従って、女性が多数を占めることになる。ヒステリーという概念をめぐるのは、多岐にわたる視点から論争されており、男女という性差間の問題のみにとどまらず、ヒステリー疾患自体がユダヤ民族特有のものと捉えられてきた歴史を解体する視点もある。⁴ しかしながら本論では、欧米では第二派フェミニズムの当初より議論されている性差という視点からヒステリー言説を再考し、とりわけヒステリーにおける患者と医者間に産出される権力関係を、文学解釈への応用という視点を目指すことにより、双方が使用する言語という伝達メディアの差異に焦点を当てながら解体していくことにする。

精神分析をする主体としての男性とそれを受ける客体としての女性—ヒステリー患者—という構造は、社会における性差を考察するうえで一つの重要な基盤となるべきものである。それというのも、ヒステリー症状は精神分析においては女性の病気というだけではなく、女性そのものとさえ考えられるようになるからである。⁵ フロイトの精神分析を批判的に解釈することによって構築された70年代のエクリチュール・フェミニンを主導したと言われているフランスの批評家は、エレヌ・シクスー (Hélène Cixous, 1937-)、リュース・イリガライ (Lucy Irigaray, 1930-)、ジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva, 1941-) に代表される。ヒステリーはこれまでラカンの言語理論との関係でしばしば議論され、フェミニズム的にもこれまで取り上げられてきた。

ヒステリー言説と社会のなかで生成されるジェンダーとの関係を考察するとき、オーストリアの女性作家インゲボルク・バッハマン (1926-1973) の作品が非常に興味深い一例を示してくれている。バッハマンはドイツナチス政権が崩壊した戦後に活躍した作家である。彼女が書斎に保持していた図書の中には、ドイツのズーカンブ社 (Suhrkamp) から出版されたフロイト全集があり、とりわけフロイトのヒステリー研究『ドーラの症例』と「不安」に関する精神分析は何度も繰り返し愛読されていたという。⁶ 従って、バッハマンの作品群にフロイトの精神分析、とりわけ女性性とヒステリーというテーマが多大な影響を及ぼしたことは、彼女の作品を言及するうえで確認されるべき重要な事実である。彼女の断片のまま残された小説『フランザの場合』(1965/66) は、精神治療における分析家と女性患者という関係をジェンダーという視点から描いた作品と位置付けられる。すなわち、主人公フランザは夫であり診断家であるヨルダンと生活を共にしているのだが、愛のうえに成立するはずであった男女の関係は次第に錯綜し、ついにフランザはもはや妻ではなく彼の精神分析の対象—患者—として診断されることになるのである。本稿最終章ではヒステリー言説を理論的に展開した後で、『フランザの場合』を例にしてジェンダーの問題性を考察していくことにする。

2 女性性とヒステリー

20世紀初期の精神分析において、女性の心理分析が男性のそれと比べはるかに難解であることは既にフロイトの女性性を指す有名な隠喩の言葉「暗黒大陸 (dark continent)」に見て取れる。男性の精神の発展は既に幼児体験から、エディプス・コンプレックスにいたるまで、性生活全般にわたり男根 (Phallus) を中心にとらえるために明瞭に構造化されうるが、女性は男性のモデルを応用することによっては分析されえない。フロイトはあくまで男性・女性の性別にかかわらず、性発達の初期段階としての前エディプス期にあらわれるリビドーを常に「男性的」だと解釈しているが、それは女性の多様性を考える上では否定されるべきテーゼである。

このことについてはリュース・イリガライが彼女の主著の一つといえる書物『ひとつではない女の性』において言及している。⁷ 彼女の言説は生物的に見て女性が男性とは異なり「あちこちに性器を持つ」⁸ 存在であると認識することから始まる。それというのも、その根本は女性というアイデンティティが一つであると確定することが不可能からだと言える。つまり、男性が男根によって象徴化されるのに比べ、女性の身体を何かによって象徴化することはできず、それは常に不確定な存在であると捉えられるからである。女性のセクシュアリティは男性のような単一なるものではなくて、多様な機能を持ち備えたものであり、したがってそれを性と精神の単独の基準、つまり男性性に合わせて理解することはできない。女性性が複数性の上に成り立っているということは、言語ならびに「テキスト」を考察するうえでも重要な問題となる。つまり、テキストに記述される言葉は単一の文法によっては語りきれない多様性のなかに生きていられるからである。⁹ イリガライは、女性の複数性を強調しながら次のように叙述している。

女の性器はひとつではない。少なくともふたつはあるが、ひとつずつに識別できない。それに、女にはもっと多くの性器がある。女のセクシュアリティは、少なくとも常に二重であるが、さらに複数である。今や文化が複数であろうと望んでいるように？今やテキストが複数形で書かれているように？テキストがどんな検閲を起点としているかもよく知らずに？¹⁰

女のセクシュアリティは従って不定形なのだから、彼女の使用する言語も男性的視点からとらえて一元化することはできない。つまり既成の文法にあてはめて女性的言語である複数性を解釈することはできない。フロイトの精神分析の対象となったヒステリーについて考察することは、男性の言葉とは異なる女性の言葉、テキストといかに向き合うかということに他

ならない。このことは従って、マリアンネ・シュラーの言葉によって表現されているように「女性そのものであると定義されるヒステリー」¹¹を理解するうえでの基盤になると言える。つまりヒステリー患者といわれる女性たちの話す言語は既成の文法の枠から逸脱し、複数形のなかで生成されているのである。ヒステリー患者の言葉、換言すれば女性の言葉は、無意識の中で生成されるために流動的であり、たえず変化そして生成する可能性を持ちえていると言える。無意識の中にある言葉の断片に、いかにして表現形式としての型もしくは意識化としての文法を与えることができるのだろうか。ここで精神科医ブロイアーによって診断されたヒステリー患者の一人を象徴するアンナ・Oを例にとり、彼女の言語活動の問題性を具体的に取り上げていくことにする。

アンナ・Oがブロイアーのもとを初めて訪れたのは1880年、彼女が21歳のころであった。その頃、彼女は既にヒステリー症状とみられる兆候、すなわち白昼夢や視力の低下があったけれども、その症状が決定的になったのは彼女が体験する精神的トラウマによる。それは、アンナがブロイアーのもとを訪ねた同年7月に彼女の父親が膿瘍をわずらい、彼女の献身的な看護にもかかわらず、翌年1881年4月に死去したという事実である。アンナは非常に父親を愛していたため、彼の死は彼女に肉体的にも精神的にも拭いがたい決定的な影響を与えることになる。このトラウマによって、彼女の記憶の連鎖は切断され、断片的にしか過去を思い出せなくなるのである。ヒステリーは肉体的そして精神的、両方の症状となってあらわれる。それ以来、アンナは激しい咳に悩まされ、さらに白昼夢が悪化することによって「黒い蛇の幻覚 (Halluzinationen von schwarzen Schlangen)」¹²を見るようになる。

ブロイアーは彼女のこのような症状を「睡眠術療法 (Hypnose)」と「会話療法 (Sprechbehandlung)」によって1年半にわたって治療しようと試みたのだが、その際アンナに見られるもっとも顕著な症状に悩まされることになる。つまり、アンナにおこった言語障害がそれであり、母語を彼女は以前までのように流暢に話すことができなくなり、その代わりに英語でのみコミュニケーションをとるようになった。母語における識字障害も見られるようになり、ドイツ語の代わりにフランス語とイタリア語を読むようになる。ブロイアーが既に治療のはじめ、1880年に伝えているように、アンナは非常に優秀で頭の切れる理知的な女性であり、同時に「豊かな詩的かつ想像的な才能」¹³に恵まれており、常に「鋭敏で批判的な理性」¹⁴によって活動していた。アンナの軌跡を読むと、彼女は病状が回復したのちフェミニストとして活躍するが、その時期に折に触れ、幾つもの文学的作品を書いていたことが分かる。¹⁵1888年には『子どものための小さな物語』を、1890年には『古道具屋で』を出版しているし、ノイ・イーゼンブルクホームを設立してからも、女性や子どもたちを励ますために物語を創作しては朗読会を行っていた。¹⁶ そのような女性であるから、複数の言語を操ることが可能であったのだが、

ヒステリーの兆候として見られたのは、母語に障害が生まれるという事実であった。つまり、この症状は母語を規定しているあらゆる文法・シンタックスが欠如することを意味している。文章における語の正しい並び方が乱れるために、ある単一の文法という法則にのっつては会話が成立しなくなる。ブロイアーはアンナのそのような状況を次のように記述している。

まず、アンナの言葉が失われていることに気がついた。話せない単語の数は次第に増していった。次に彼女が話すと、すべての文法、どのシンタックス、すべての動詞の人称変化も失われていった。ついには弱変化する過去完了によって作られる不定形を間違っ使用しはじめたし、また冠詞は抜け落ちていった。そして時間がたつにつれて言葉は完全に失われ、どうにか彼女は単語を4または5ヶ国語のなかから拾い出したけれども、文章はもうほとんど理解できないものだった。書くことを試みても、同様の特殊語でしかなかった。(それは症状の始まりのころであって、後に拘縮があるともう書くこと自体ができなくなった。)¹⁷

しかしそれは反面、男性の視点からではなく女性自身の視点から見れば、男性的な象徴化、つまり文法という法則によって生まれる文の単一化からの解放を意味するものでもある。単一化からの解放は、同時に複数性・多様性を可能にする。女性のセクシュアリティにも既に見られるように、女性は本来「あちこちに性器を持つ」¹⁸存在なのであるから、言語のレベルにおいてもシンタックスからの解放は女性性と自然に結びついてくる。

レナーテ・シュレージアは彼女の論文において、ヒステリー女性一般にみられる言語活動について、その文法から解放された言語の快活性をとりわけ強調している。ヒステリー患者は一般に、「身体・身振りによる言語 (Körpersprache)」¹⁹と「比喩的な言語 (Bildersprache)」²⁰を使用しており、それは「生き生きとしたヴィジュアルな比喩的表現形態 (lebhaftes, visuelle Bilder)」²¹を形成していると言える。これらの表現方法は、無意識から生成される表現形式とすることができる。無意識の中に抑圧されている「身振りによる言語」や「比喩的表現」を分析し、それらバラバラな物を結びつける、つまりそれはトラウマによって引き起こされた切断された記憶の連鎖を再度修復するのを助け、ヒステリー患者の「過去を思い出すという能力」を再び活性化させる役割を担っている。アンナの場合においても、過去の記憶の修復は純粋に言葉を介した会話療法—それをアンナは自慢の英語で「お話し治療 (talking cure)」²²と表現した—によって行われる。アンナの場合は父親を病で亡くしたという過去の事実だけが鮮明に意識されているのだが、そのほかの過ぎ去った記憶は無意識の中に抑圧されてしまっているために、精神科医ブロイアーに任された課題は、この意識の連鎖の欠如を彼女の保持している

「比喩的表現形態」を解釈しながら、修復していくということであった。この作業は女性の心理、あるいは女性性そのものに対して、ある一定のシンタックスを与え、解釈を可能にするものといえる。患者の精神治療が成功するかどうかは、分析家が理論的な精神分析の方法を如何に正しく実行するかにかかっていることはもちろんであるけれども、そのほかにとりわけ分析家の非常に繊細な感受性がどれほど患者の心理に寄り添うことができるかにもよる。従って、レナーテ・シュレージアはこのようなヒステリー患者の治療に際して、無意識的表現の意識化が誤って行われた場合におこりうる「死」の危険性について言及している。²³ それはつまり、分析家によって実行される意識化によって、患者の無意識から発せられる表現形態がもし「からからに干からびさせられる (austrocknen)」²⁴ ようなことが起こる場合、それはやっと回復へと向かいつつある精神が死へと追い込まれるのと同様である、と。

分析家とヒステリー患者の関係は従って、無意識の意識化をめぐる生と死の境界線をも規定しかねない重要な意味を担っている。この関係を考察していくとき、言語、すなわちシンタックスを保持している分析家とそうではないヒステリー患者との間に、潜在的に権力関係が成立しているということが、ここで特筆されねばならない。断片的にしかシンタックスを操ることのできない患者にとって、分析家の言語が絶大な影響力を与えうる存在であることは自明のことであるから、そこに生成される権力関係—つまり強者としての分析家と弱者としてのヒステリー患者—が如何に調和を保った状態で発展していくかが、療養期間に行われる病状の治療の行方を左右すると言える。フェミニズム研究においては、以下に引用するフロイトの行っていたいわゆる『ドーラの症例』は、この分析家とヒステリー患者という必然的権力関係によって起こった失錯と考えられている。²⁵ 次章では、『ドーラの症例』を取り上げながら、分析家によって行われる無意識の意識化の過程に見られる問題性を解明していくことにする。

3 解釈のゆらぎとアイデンティティの喪失

フロイトは「カタルシス治療」を引き継いだのだが、フロイトの方法はブロイアーのそれとは多少異なっていた。それというのも、フロイトはもはや睡眠術療法を使用せずに純粋な会話によってのみヒステリー症状を治癒することを試みたのである。会話によってのみヒステリー症状を治癒するという試みは、言語と直接的にかかわりあい、患者の無意識からの発言を如何に解釈するかという問いと直面している。それは換言すれば、女性性とその不定形な言語といかに取り組み、それを象徴によって秩序づけられた、つまりシンタックスによって統制された言語領域の範囲で解釈するか、という問題との対決を意味している。フロイトはブロイアーとの共著『ヒステリー研究』で4人の女性患者を観察しているが、彼独自のヒステリー研究として最も著名なものは診察当時18歳の少女であったドーラについての分析である。

いわゆるドーラの症例が描写されている『あるヒステリー分析の断片』は1901年に書かれ、1905年になってはじめて刊行された。この出版年から見ても理解できるように、ドーラの症例はフロイトの『夢判断』が1900年に発表された直後に位置している。従って、彼の精神分析の方法ならびに構造化の根底に、女性のヒステリー症例の解釈が多大な影響を及ぼしたことは自明のことである。『あるヒステリー分析の断片』が1901年には『夢とヒステリー』という題名で書かれていたことを踏まえても、いかに夢判断とヒステリー解釈が密接な関係に位置しているかが分かる。²⁶ 実際、この本にははじめの第一章にドーラの病状と家庭環境が詳細に記述され、続く2章にわたってドーラの語った夢がフロイトによって分析されている。第一番目の火事の夢²⁷ はドーラが定期的に繰り返し見る夢であったため、特にフロイトの関心を引き起こした。第二の夢はドーラが見知らぬ街で迷子になり、なかなか目的地にたどりつかないという内容である。²⁸ この二つの夢の分析を通じて、フロイトは女性性を象徴しているヒステリー症状の治療に接近しようと試みる。夢は無意識から発せられる願望であるということはフロイトの重要なテーゼであるのだから、無意識から生成されるヒステリーの表現形態、いわゆる身振りによる表現などの解釈にとっても患者の夢は欠かせない資料となる。患者の無意識における願望が次第に明るみに出されることによって、病気の原因も徐々に解明へ向かうことになる。このことから理解できるように、純粋な会話による精神療法である「お話し治療」にとって夢の分析は重要な位置を占めていると言える。『夢判断』の被験者となっているのは男性が多数を占めていることは事実だが、夢判断という方法ならびに夢の原因の構造化は女性のヒステリー患者たちの分析によって獲得されたものに他ならない。つまり、ヒステリー解釈—広義の意味で女性性への関心とその分析—は近代的な精神分析の始まりと考えられる。²⁹ 『あるヒステリー分析の断片』はドイツにおいては精神分析の領域に限らず、文学界からも非常に芸術性の高いものとして評価を受けている。³⁰ この『ドーラの症例』に関してはフェミニズム的見地から検証されているので、その研究を参考にしつつ以下ヒステリー言説にみられる問題を解体していくことにしたい。

ドーラがウィーンのプロイトのもとを訪れたころには、彼女は神経症並びに偏頭痛、激しい咳をして記憶の欠陥などといった症状に悩まされていた。ドーラの父親も病気がちで、すでに娘が6歳のころ（1888年）から結核に感染していた。ドーラは様々な医療機関へ足を運んだが症状は一向に良くならなかったため、父親の推薦で彼女はやっとフロイトのもとを訪れることになる。それまで彼女はどんな医薬品を試してみても、体が受けつけなかった。フロイトは「お話し治療」を駆使して、ドーラの家環境と家族関係がいかに彼女のヒステリー症状に影響しているかを詳細に解明しようと試みている。錯綜した人間関係は主に、ドーラの父親、母親、それに加え彼女の家族と親密であったK氏とその夫人、そして彼女の家庭教師を巡って

展開する。また、既に言及したようにフロイトは夢判断を通して、ドーラの無意識における愛情の願望を様々に解釈している。

ヒステリーは患者の意識、無意識の両方が回復されない限り治るものではなく、フロイトの解釈に従えば、ドーラのヒステリー症状はたいていの場合、「性機能 (Sexualfunktion)」³¹を引き起こすものが極端に抑圧されることによって体の各所にでてくるのだという。たとえば、喉の炎症はリビドーが発散されずに抑制されることによって、その影響が性感帯である喉にでてくるからひき起こされるのだという。³²ドーラの場合は咳に悩まされていたが、その症状をフロイトは錯綜した男女関係によって生まれるリビドーによるものと考えた。既にシュラーがフェミニズム的視点から指摘しているように、フロイトのヒステリー解釈に混乱が生まれるのはリビドーが生成される根源ともいえる男女の心理を、男性優位の視点から分析しているからといえる。³³フロイトにおいて男性、女性のリビドーの構造化は常に男性主体で捉えられていることは、イリガライも『ひとつではない女の性』のなかで述べている。「リビドーは、男性に現れても女性に現れても、欲望対象が女性であれ男性であれ、常に男性的だとフロイトは主張する」³⁴、と。リビドーの組織化は根本的に男性優位の位置からとらえられるのだから、ドーラのヒステリー解釈に至っても、男性的視点から病状の原因が読み解かれていくのは自明のことである。しかしながら、複雑な男女関係を解体する際に、シンタクスに則つてのみでは蔽いきれない女性特有の「表現」があることを忘れてはならない。その「表現」は『あるヒステリー分析の断片』の中では常にフロイト自身の「解釈」の目を通して語られてゆく。この精神分析が非常に文学性の高いものとして評価されている所以も、確固とした「語り手 (auktorialer Erzähler)」の存在³⁵にあるといえる。しかしながら、もし「語り手」が解釈を自らの優位的立場から行うとき、先にも言及したように、無意識からの声は压制されかねない。分析家とヒステリー患者の関係は非常に敏感なものであるということは、フロイトが繰り返し使用している言葉「秘密の厳守 (Diskretion)」³⁶にも読み取れることである。

ここで先に結論を述べてしまうと、ドーラは父親の推薦でフロイトのもとを訪れ治療が開始されたのだったが、結局彼女の症状は一向に改善せずに予定されていた治療は完結することなく、彼女はフロイトのもとを去る。フロイトの様々な病状の解釈によってドーラの症状は概ね改善の傾向を見せていた。しかしながら結局、解釈のゆらぎはドーラのアイデンティティを混乱へと導いてしまう。なぜドーラは自らフロイトのもとを去ったのか。彼女はそのことについて明言を避けているので、それにたいする答えは推測するしかないのだが、彼女がフロイトの治療にドーラの精神生活のすべてを知り尽くした強者としての分析家の姿、つまりそこに生成される権力を感じ取ったからと言うことができよう。診察が中断されてから15カ月ほどしてやっとフロイトはドーラからその後の報告を受けている。すなわち、彼女はフロイトのもとを

去ってから、次第に症状が改善し、再び健康を取り戻したとのことであった。以上が『ドーラの症例』の結論なのだが、ジェンダー研究の側からこの症例を考察するのならば、まさにヒステリー分析のこの片寄った、つまり男性優位の、女性劣位の二項対立としての観点が女性性の解釈の欠点と見なされていると良い。それではフロイトは実際どのようにドーラのヒステリー症状を解釈していったのだろうか。以下、『ドーラの症例』を解釈しながら、この間いを解体してゆくことにする。

4『ドーラの症例』における男女の心理描写

ドーラが示すヒステリー症状を説明するために、フロイトは彼女の両親とK氏・K夫人、ならびに家庭教師をめぐって展開される人間関係を読み解いている。K一家との交際はすでにドーラの父が病気になる前から始まっていたのだが、それが親密さを増したのはK夫人が父の世話をはじめたころからだった。³⁸ その頃にはすでにドーラの母親は父の看護をしていなかったようである。父とK夫人の交際は次第に親密になり、しまいには金を送るようになる。フロイトは、父がその事実を隠すために母やドーラに対しても気前よくふるまうようになったと解釈している。フロイトによって説明されるドーラの錯綜した愛情は、あるときは父への、またあるときはK氏にたいする愛となって描写され、その時々には成就することのない関係のために、彼女の身体の各所に象徴的にヒステリー症状が現れるとされる。実際はどうであったか立証することは困難だが、フロイトはドーラの症状をリビドーの抑圧からくるものと判断したため、彼女の人間関係も常に性関係を基準にして考えられている。性的テーマを扱うことは、ヒステリー分析を始めるうえで回避できない事柄であることは、同書のなかで言及されている。³⁹ 例えば、ドーラの激しい咳ならびに失声症は、きまってK氏が不在の時に起こるとされる。K氏が不在ならば、彼と一緒に話すことはできない。それを象徴するかのようにドーラは話すという行為を忘れたのである、と。

不在の人とは一緒に話すことができない。それゆえに、その人と文通しようとするのは、声が出ないのに代わって文字で意思疎通しようとすることに大変近いものがある。ドーラの失声症については従って次のような象徴的解釈が成り立つ。つまり愛人がいなかったとき、彼女は話すことをやめた。愛人と話すことができなくなったのだから、話すという行為は価値を失う。そのために不在の者と文通するための唯一の手段として書くという行為が意味をもったのである。⁴⁰

K氏の不在時に限って声を失い、その代わりに文字を欠く能力が向上したというのであれ

ば、その症状の原因をつくりだしているのはドーラのなかに潜むK氏への愛情であると考えられる。つまり、ドーラがたとえK氏への愛情を口頭で否定したとしても、この男性がいなければ起こりえない症状であると考えることができる。このヒステリーの症状はドーラの内面で抑圧された前エディプス期の父への愛が、K氏に投影された結果に起こったものであると解釈され、症状の原因はK氏の行動にではなくドーラ自身にあるとされる。

さて、ここでもう一つ例を挙げておくことにする。先にも述べたことだが、『あるヒステリー分析の断片』には二つの夢が分析されているのだが、第一番目の火事の夢に注目してみたい。

家が火事になっている、そうドーラは語った、父が私のベッドの前に立っていてそして私のことを起こした。私は急いで服を着る。母は宝石箱を持ち出そうとしているが、父は母に向かって言う。おまえの宝石箱のせいで俺と子どもたちが焼け死ぬのはごめんだ、と。急いで階段を下り、外に出たとき、私は目が覚めた。⁴¹

『夢判断』のなかにも夢が「無意識からの願望 (ein Wunsch aus dem Unbewußten)」⁴²であることは主要テーゼとして記述されているけれども、この第一の夢の分析においてもフロイトのテーゼは変わることはない。ここで注目したいのは、いかに少女の愛情が異なる形で父と母に向けられているかということである。つまり、父と母という性差間においてドーラの感情の表れ方が大きく異なる一少なくともフロイトはそう解釈している—という点である。ドーラがK氏に対して抱く愛情については先に述べたが、父に対してはそれ以上といえるほどの愛情が期待されており、それを示す一例として第一の夢が分析されることになる。「家が火事になっている」という文脈はドーラの危機的状況を示しており、父はその火事を彼女に知らせる存在、つまり彼女を危険から守る存在として現れる。火事の中母は「宝石箱」を持ち出そうとしているが、宝石箱をフロイトは女性の性器の比喩であると考えていることから、ドーラの同性である母親にたいする嫉妬がそこに表現されるのだという。つまり、母への嫉妬は同時に父への幼児的な愛情と深く結び付いているのである。イリガライが記述しているように、フロイトは前エディプス期としての幼児段階にある女の子を小さな男の子と考えたため、エディプス・コンプレックスも男の子と同じように起こるとみなされる。つまり、イリガライの言葉を借りれば「女の子が母を愛するのは小さな男性としてである。娘—女性と母—女性に特有な関係はフロイトによってほとんど検討されない。[...]彼は女の子の母に対する欲望を男性的、男根的欲望とみなす。だからこそ、女の子が価値ある性器に比べ自分が去勢されていると、また母を含めすべての女性もそうだと発見するとき、母との絆の必然的な断念が、さらに母への憎

悪が生まれるのである。」⁴³ 従って女の子は、父親への愛情を示すかわりに母親へは、自分の去勢の原因をそこに感じ取るために嫉妬という感情を抱くと考えられる。この男性を中心とした心理モデルに対して、『ドーラの症例』においてもフロイトはドーラが母への嫉妬を、そして同時に父への欲望を抱いていることを強調している。夢はそれが象徴的に表れたものである、と。火事からドーラを救い出そうとする父への愛。それに対し、自らの宝石箱を持ち出すために躊躇している母への不快は、結局生死を分ける場面へと発展する。すなわち父は母に対して、「俺と子どもたちが焼け死ぬのはごめんだ」と叫ぶに至るのである。このファルス中心主義的な解釈に対するモデルを、批判的視点から書き換えた戯曲としてエレヌ・シクスーの『ドーラの肖像』(1986)が挙げられるが、その中でシクスーは主人公ドーラの同性愛的傾向をK夫人に投影させることにより「母—娘」の関係の見直し、さらには個別の関係からより抽象化された「母としての聖母」への関係へと発展させている。K夫人に対するドーラの思慕は神聖さを帯び、男女の間に生まれる支配関係からは解放された愛情を想起させる。

イリグライの言葉、「娘—女性と母—女性に特有な関係はフロイトによってほとんど検討されない」ことは、女性特有の性関係にたいする心理モデルが形作られずに、男性モデルにそって女性の心理が描写されることを意味しているといえるだろう。ドーラ自身はフロイトのこの症例における分析では、あるときはK氏に恋心を抱く女性として、またあるときは父を愛する女性として描写されるが、結局彼女自身の主体性は「語り手」によってほとんど描写されることはない。ドーラの無意識からの声は男性的モデルによって語られはするが、女性自身の「表現」としては意識化されずに闇の中にとどまり続ける。ドーラという—女性のアイデンティティは確立しないまま、『ドーラの症例』は精神分析の一つの断片として残ることになる。シュラーはこの状況を、ころころと展開する男女関係のはざまの中で消滅している女性像という意味を込めて、「彼女自身は何者でもない (sie [ist] quasi „nichts“)」と表現している。⁴⁴

5 社会構造とヒステリー言説—ジェンダーへの問い

本稿最後の章になるが、ここでフロイトのヒステリー分析との関係から、オーストリアの女性作家インゲボルク・バツハマン (1926-1973) の長編小説『フランザの場合』⁴⁵について一考察加えておきたい。バツハマンはナチスドイツが崩壊した戦後に活躍したオーストリアの作家であり、当時1947年から活動を続けていた文壇47年グループの一員であって、ドイツ・オーストリアを含め様々な賞を受賞した。彼女の作品は主に、抒情詩、ラジオドラマ、小説、エッセイ等に分けられるが、そのほかにも作曲家ハンス・ヴェルナー・ヘンツェへ贈った歌劇の台本などもある。ここでは彼女の後期作品、「さまざま死に方」というテーマにおいて書かれた三部作のうちの一つである小説『フランザの場合』を取り上げたい。主に1980年代から

バツハマンの作品は様々な観点から受容されてきたが、とりわけフェミニズム研究において注目され、文学史においてはジェンダーの問題に取り組んだ作家として位置付けられるようになる。バツハマンの文学テーゼに、「戦争は爆撃によってはじめて開始されるのではなく、すでに人間関係において始まっている」⁴⁶ というものがある。そこでは人間関係において生成される権力の存在が暗示されており、精神的死⁴⁷を引き起こしかねない問題として彼女の作品の中に描かれることになる。『フランザの場合』においても、一貫してこのモチーフが貫かれており、そこでは誤って行われた場合の精神分析への危機が語られることになる。ここで簡潔にあらすじを記述しておくことにしたい。ウィーンに住む主人公の女性フランザが、夫であり精神科医でもあるヨルダン博士によって彼の精神分析の症例にされる。フランザは徐々に精神を病み、一人では生活できないほどになるため、救いを求めて弟のマルチンに対して手紙を送る。フランザはウィーンを脱出し、生まれ故郷へ帰り、そこでマルチンに出会う。しばらくの休息の後、二人は徹底的な科学的合理性に貫かれた西洋文化を問い直すためにエジプトへ旅に出かけるのである。

『フランザの場合』は、完結されずに断片のまま残った。書かれ始めたのは1965年から1966年にかけてであり、バツハマンはこの作品の一部を1966年に初めて北ドイツをまわる朗読会において発表している。この断片がヒステリー言説と関係しているのではないかという仮説は、先行研究において指摘されている。⁴⁸しかし、それは『フランザの場合』の中に描写された分析家としての男性と患者としての女性の言語の使用の在り方に注目し、この権力関係を読み解いているものではない。従って、本稿では既に前章においてヒステリーにおける言語に視点を当てて読解してきたように、作品解釈において、この観点を独自の論点として以下作品解釈に入っていくことにする。

ここで本稿の作品解釈の立場を明示しておかねばならない。すなわち、バツハマンの描く人間関係はなるほどヒステリー言説をめぐって展開されているけれども、バツハマンはここで分析家と患者の関係にとりわけ批判的な光を当て、誇張しながら描写することによって、現実では直視されずに見過ごされているが、社会の中で起こりうる可能性のある危機としての権力関係に敏感に気がつき、独自の作品として問題提起しているということである。バツハマンが描く主人公フランザは分析家ヨルダンの妻である。彼女の視点から語られる小説第二章においては、フランザ自身はいつから自分がヨルダンの症例の対象となり始めたのか、まったく意識できずにいる。ここでは従ってフランザは妻としてヨルダンに己を「ゆだねていた (anvertrauen)」⁴⁹存在として描かれている。彼女の方からすると純粋な愛に従ったためにヨルダンと結婚生活を送ることができたのだが、分析家としてのヨルダンから見ればフランザは精神分析の対象という役割を担った客体として診断される。二人の関係の纏れは、相手に対する期待の相

違にあったということが出来る。つまり、フランザがヨルダンに身をゆだねたのは、精神分析によって治療されるべき何らかの魂の病を患っていたからではなく、夫という立場にいるヨルダンに対する信頼に従ったからである。

私は病気だったのではない、私は患者として彼のところへ来たのではない。そのことは正当化されるはずであるのに。私が彼のもとへ来たのは、自らを彼にゆだねたからである。結婚はゆだねること以外の何であるといえるのか。相手の手の中に、自らがどんなに小さな存在であろうとも自分をゆだねるということ以外に。⁵⁰

しかしながら、ある日ふとヨルダンが不在のときに、フランザは彼の部屋の窓をあけるのだが、そのとき彼の机の上に置いてあった紙が机から落ちる。通常はローズィという女性が彼の部屋の清掃を担当しており、その時間帯にはフランザ自身は家を空けているために、滅多に彼の書斎に立ち入ることはないのがであったが、この日は偶然にも彼女がその役を代わりに行ってしまふ。紙を拾い上げた彼女は、それが「速記術 (Stenographie)」⁵¹によって書かれた自らの症例であることに気づかされるのである。はじめ彼女はその紙切れが何であるのか理解できずに、寝室に座り、それを熟読する。しかしながら、次第にそこに書かれた内容に目を走らせるうちに、ヨルダンに対する疑念とともに自分が夫の分析の対象となっていることを知ってしまう。

既にプロイアーがアンナ・Oを治療した際に言及していることであるが、ヒステリー患者の特徴として患者は意識化されたシンタクスに基づいて症状を説明することができない。言葉がうまく口から出てこないために、ときには母語を回避し、英語やフランス語、イタリア語といった外国語で、外の世界と意思疎通をはかるしかない。二週間あまり言葉を失い、無言であることもあったし、錯語にみちたジャルゴンでしか会話できないことも症状として現れた。時に、言葉を話せないために、筆談によってしか伝達が図れないため、プロイアーとの療法は何度も中断せざるを得なくなった。また、ドーラの場合においても、K氏が不在のときには失声症が起り、相手と会話することができなくなり、筆談するのがやっとという状態に陥る。しかし、フランザの場合は母語を失ったわけではない。彼女は言葉を保持している。それというのも、彼女は「辞書のある文化」⁵²の中に生き、「すべての状況を表現できる言い回し」⁵³を使いこなしているからである。「辞書を使いこなす」という比喩が示唆しているのは、女性として男性的意識化されたシンタクスのなかに自らの表現形態を見出す能力があるということである。加えて、フランザは言語を使用する必要のない、どこか無名の「ジャングル」⁵⁴で生活しているのではなく、言語という伝達メディアをもつ「文明」⁵⁵のただなかに生きているのだ

と認識している。それは、言葉を駆使することによって、自らの存在を表現できる能力があるということの意味している。一方が言語を保持し、他方が保持していないのであれば、そこに権力が産出されるのは避けられない。しかしながら、一方が言葉により意思を伝達できるにもかかわらず、他方がそれに耳を傾けないのであれば、それは意図的に他者を排除する行為に繋がってしまう。ここでバツハマンが、登場人物の患者の立場にある女性に、敢えて「言葉」を与えることによって男女関係を描写することで、両者の間に生まれる権力が分析家に依拠した意図的なものであることが強調されている。

フランザの場合は女の愛という「一つ」ではない表現形態、つまり言葉を駆使しながら相手に対する信頼を多面的に表現する方法が、ヨルダンという分析家にとっては症例として解体される対象でしかなくなる。女性と分析家の間の権力関係としての深淵は小説を読み進めるごとに、さらに消し難く広がってゆく。分析家にたいする「恐れ (Furcht)」と「不安 (Angst)」⁵⁶という語が繰り返し使われ、その状況はついには死への恐怖へと繋がってゆく。

一見、個別的な一例としての男女関係と読まれがちなヨルダンとフランザの物語であるが、その背後には、この関係は強者と弱者という権力関係を生成する父権的社会構造の根源を作り上げているというバツハマンのメッセージが読み取れる。フランザは女であり、妻であり、患者であると同時に、「身分が低い人種 (von niedriger Rasse)」⁵⁷でもあると明言されている。バツハマンに従えば、女性という性は社会の中で弱いものとして存在し続けており、暗黙のうちに構造化されてしまうジェンダーの狭間で常に犠牲者として苦悩する立場におかれるのである。『フランザの場合』だけに限らず、彼女の後期散文作品には、意義深いことに、彼女故に書くことができた独特の、社会から抑圧されて死へと向かう「さまざま死に方」が叙述されているが、ジェンダー研究の立場から解釈すると、それがより鮮明に理解されてくる。本稿では精神分析とヒステリー言説との関係から、この一端としての未完小説を取り上げてみた。

Footnotes

- ¹ Freud, Sigmund. (2009). *Die Traumdeutung*. 2. Aufl. Frankfurt am Main. (Original work published in 1900.) 本稿では次の邦訳を参照する。『夢判断』（高橋義孝、菊盛英夫訳）日本教文社, p. 5.
- ² Schuller, Marianne. (1990). *Im Unterschied. Lesen, Korrespondieren, Adressieren*. Frankfurt am Main, S. 22.
- ³ エランベルジェ. (1999). 『エランベルジェ著作集 1 無意識のパイオニアと患者たち』（中井久夫, Trans.）, 三陽社, pp. 149-174.
- ⁴ S. ギルマン. (1996). 『ユダヤ人の心 フロイト、ドーラ、およびヒステリーという概念』（管啓次郎, Trans.) 『イマーゴ』 青土社, pp. 260-299. S. Gilman. (1991). The Jewish psyche: Freud, Dora and the idea of the hysteric, in *The Jew's Body*.
- ⁵ ebd., S. 24.
- ⁶ Pichl, Robert. (1993). Ingeborg Bachmanns Privatbibliothek. Ihr Quellenwert für die Forschung. In Götttsche, Dirk & Ohl, Hubert (Hrsg.). *Ingeborg Bachmann – Neue Beiträge zu ihrem Werk*. Internationales Symposium Münster 1991. Würzburg, S. 383.
- ⁷ Irigaray, Luce. (1977). *Ce sexe qui n'en est pas un*. les éditions de Minuit.
リュース・イリガライ 『ひとつではない女の性』（棚沢直子, 小野ゆり子, 中島公子, Trans.）
東京：勁草書房, p. 40.
- ⁸ ebd., S. 31.
- ⁹ イリガライと同時代にジェンダー思想を展開したジュリア・クリステヴァは『詩的言語の革命』のなかでシンタクスによって統率されている男性的サンボリックと芸術的複数性の中に生成される女性的セミオティックについて記述している。言語はクリステヴァに従えば、サンボリックあるいはセミオティックだけでは成り立たず、両者が共鳴することによって初めて使用可能になるという。
- ¹⁰ Irigaray, 1977, S. 30.
- ¹¹ Schuller, 1990, S. 24.
- ¹² アンナの髪や衣服の帯などが黒い蛇の幻覚になってあらわれては度々彼女を悩まし、不安に陥れた。『ヒステリー症例』のアンナの場合にはとこところにわたって、この恐ろしい幻覚という症状について言及されている。
- ¹³ Breuer, Josef & Freud, Sigmund. (1991). *Studien über Hysterie*. 6. Aufl. Frankfurt am Main, S.42. Original work published in 1895.
- ¹⁴ ebd.

- ¹⁵ 田村雲供 . (2004). 『フロイトのアンナ O 嬢とナチズム - フェミニスト・パッペンハイムの軌跡』 京都：ミネルヴァ書房 .
- ¹⁶ ebd.
- ¹⁷ Breuer & Freud, 1895, S. 45f.
- ¹⁸ Irigaray, 1977, S. 31.
- ¹⁹ Schlesier, Renate. (1990). *Mythos und Weiblichkeit bei Sigmund Freud. Zum Problem von Entmythologisierung und Remythologisierung in der psychoanalytischen Theorie*. Frankfurt am Main. S.43.
- ²⁰ ebd., S.52.
- ²¹ ebd., S. 53.
- ²² Breuer, 1895, S. 50.
- ²³ Schlesier, 1990, S. 54.
- ²⁴ ebd.
- ²⁵ Lindhoff, Lena. (2002). *Einführung in die feministische Literaturtheorie*. 2. Aufl. Stuttgart. S. 139.
- ²⁶ Freud, Sigmund. Bruchstück einer Hysterie-Analyse (1905). In Freud, Sigmund. (1971). *Hysterie und Angst*. Studienausgabe, 10. Aufl. Frankfurt am Main . S. 90.
- ²⁷ ebd., S. 136.
- ²⁸ ebd., S. 162.
- ²⁹ Schuller, 1990, S. 22.
- ³⁰ Schuller, 1990, S. 72.
- ³¹ Freud, 1905, S. 178. 尚、106 頁には次のように記述されている。「性的興奮が高まる、もしくはそれに対してただ嫌気がひきおこされるどんな人も、身体的症状があるにしろないにしろ、問題なくヒステリー患者とみなされる。」
- ³² ebd., S. 152.
- ³³ Schuller, 1990, S. 76.
- ³⁴ Irigaray, 1977, S. 40f. イリガライが指摘するようにフロイトが組織化するリビドーの問題は『性欲論三篇』の中で展開されている。つまり、女の子にとって、性発達の段階ではクリトリスのみが機能していると考えられるために、女の子は「小さな男性であり、彼女のあらゆる欲動や性的快感、特に自慰による快感は、実は<男性的>である」とみなされている。
- ³⁵ Schuller, 1990, S. 72.
- ³⁶ Freud, 1905, S. 88, 93. フロイトは『ドーラの症例』を書き始めるにあたって、ドーラが去った後、彼女の今後の生活にとって支障が起らないように数年間出版を待っていたと告白し

ている。患者への細心の配慮がここに読み取れる。

³⁷ Schuller, 1990, S. 72.

³⁸ Freud, 1905, S. 109.

³⁹ ebd., S. 123.

⁴⁰ ebd., S. 115f.

⁴¹ ebd., S. 136.

⁴² ebd., S. 156.

⁴³ Irigaray, 1977, S. 42.

⁴⁴ Schuller, 1990, S. 75.

⁴⁵ Bachmann, Ingeborg. (1993). Der Fall Franza (1965-66). In *Ingeborg Bachmann*. Piper. Bd. 3. S. 339-482.

⁴⁶ Bachmann, Ingeborg. (1991). *Wir müssen wahre Sätze finden. Gespräche und Interviews*. München, 4. Aufl, S. 89f.

⁴⁷ 精神的死が存在することについては、バツハマンより先に幾人かの作家によって既に指摘されてきた。これについては Eberhard, Joachim. (2002). „*Es gibt für mich keine Zitate. Intertextualität im dichterischen Werk Ingeborg Bachmanns*“. Tübingen. S. 374-380 を参照。例としては劇作家ブレヒト (1898-1956) の「さまざまな殺し方」という章のなかに、以下の文句がある。「さまざまな殺し方が存在する。ナイフを腹に刺しこむこともあれば、食事をとらせない方法もある、自殺へ追い込むこともできるし、戦争へ駆り立てること等々。そのうちのほんのわずかの事柄だけしか我々の国では禁止されていないのである。」

⁴⁸ Schuller, Marianne. (1984). Wider den Bedeutungswahn. Zum Verfahren der Dekomposition in „Der Fall Franza“. In Arnold, Heinz Ludwig (Hrsg.). *Ingeborg Bachmann*. Text + Kritik. München. S. 151.

⁴⁹ Bachmann, 1965-66/1993, S. 407.

⁵⁰ ebd.

⁵¹ ebd. S. 405.

⁵² ebd.

⁵³ ebd.

⁵⁴ ebd.

⁵⁵ ebd.

⁵⁶ バツハマンの作品における「不安と性差」のテーマに関しては、Kanz, Christine. (1999). *Angst und Geschlechterdifferenz. Ingeborg Bachmanns Todesarten-Projekt in Kontexten der*

Gegenwartsliteratur. Stuttgart und Weimar. を参照。

⁵⁷ ebd., S. 413.

Gender and Hysteria Discourse in Psychoanalysis

Sayaka OKI

This paper aims to discuss the works of Josef Breuer and Sigmund Freud dealing with hysteria in which the predominant analytical methods of psychoanalysis of the twentieth century are established. It is important to focus on the fact that this therapeutic relationship is between a male analyst and a female patient in discussing hysteria because the gender aspect will be investigated here from a feminist perspective.

A joint work of Breuer and Freud, *Studies on Hysteria* (1895), and Freud's *Fragment of an Analysis of a Case of Hysteria* (1905) which is also known as *Dora* will be examined in this context. Gender studies regard hysteria, specifically in Freudian psychoanalysis, as being typically a female condition. There was a 21 year old woman named Anna O. who underwent psychological treatment with Breuer. From this "talking cure", language became an important medium for analyzing the unconscious. As another example, Dora was 18 years old when she went to Freud's clinic. A psychological model of hysteria is developed by Freud primarily from his masculine perspective, though many patients are female. Thus Freud interprets Dora's symptoms mainly from a male point of view and wrote about it in his *Fragment of an Analysis of a Case of Hysteria*. The development of an identity for the patient Dora becomes problematic in the end. It ought to be asked why the sexual distinction drives the analyst's power over the female patient.

This paper investigates a possible reason for such differentiation in the function of 'libido' and the difference forms of "expression" in language between man and woman; analyst and patient. As a theoretical basis, Luce Irigaray's *This Sex Which Is Not One* (1977) will be used. Lastly, the problem of gender and hysteria discourse is discussed using the case of an Austrian author, Ingeborg Bachmann, who wrote a fragmented novel called *The Book of Franza* (1965/66). The novel shows an example of how the relationship between man and woman, analyst and patient, can be tied to power.

Keywords:

gender, hysteria, identity, Sigmund Freud, Luce Irigaray